

リュウ太が教えてくれたこと

六年 杉山結菜

私の家にはリュウ太という柴犬がいました。去年の十二月八日に虹の橋へ旅立ってしまいました。十四才九ヶ月だった。

リュウ太は私が生まれる前から家族の一員で、一人っ子の私にとっては兄でもあり、友達みたいな存在でした。

散歩や一緒に走るのが大好きで、「散歩に行くよ。」と声をかけると「早く行こうよ。」と言っているかのようにとびついてきました。

しかし、去年の夏ごろから散歩に行っても帰りはよたよたしながら歩く事が多くなっていった。ご飯も固いドックフードはかみずらいのか、ぼろぼろこぼすようになりお湯でやわらかくふやかしてからあげたり、シニア犬用のドックフードをあげるようになった。またトイレに行くのも大変なようで、おしっこや便をもらしてしまふようになった。

正直、私はそんなリュウ太の姿を見るのが辛かったし、元気だったリュウ太が年老いていってしまったのが悲しかったです。

生き物を飼う事は、楽しい事ばかりではない、飼ったからには最後まで責任を持つてお世話をする事。小さいころはかわいい、かわいいでちゃんとお世話をするけれど、大きくなったり年を取っていくにつれてきちんとお世話をしなくなる人がいる。中には面倒をみれないからと捨てたり、殺処分してくれと言う無責任な人もいる事を以前母や祖母が話してくれた。だから私は最後まで責任をもつてリュウ太のお世話をしようと思いました。

その後、リュウ太は口元までご飯を持っていかないと食べられなくなったり、おしっこで毛がビショビショにぬれてしまったり、立つ事、歩く事も出来なくなっていた。虹の橋に旅立って行ってしまふ数日前から、夜になると「キャン。キャン。」と鳴くようになっていった。リュウ太の身体をなでてあげると安心したように眠るのだが、数分経つとすぐに「キャン。キャン。」と鳴き出すのくり返して、辛くてリュウ太に「もういいよ。安心して虹の橋へ旅立って行ってね。今までありがとう。」と泣きながら声をかけました。十二月八日の朝、様子を見に行くと、最後の力をふりしぼって立とうとしているリュウ太がいました。母が身体を支えて立たせてあげると、よたよたと私の所まで歩いてきました。リュウ太のお別れのあいさつだったと思います。その日のお昼ごろ、リュウ太は眠るように虹の橋へと旅立って行きました。

私に、命の大切さと飼い主としての責任を教えてくれたリュウ太。「ありがとう。大好きだよ。」